

加藤拓川略年譜 (法学部HP公開用2024年版)

年齢	年次	加藤恒忠(拓川) 経歴・出来事等
0	1859年	旧暦1月22日 松山市湊町にて、漢学者の父・大原有恒(観山)、母・しげとの三男として出生。
7	1867年	9月17日 長姉・八重の長男として正岡常規(子規)が松山にて出生。
11	1870年	伊予松山藩の藩校・明教館に入校。(秋山好古も同時期に在籍。)
16	1875年	4月父・大原観山が逝去(享年57歳)。
17	1876年	9月23日 上京のために松山を出発し30日に入京する。
20	1879年	10月 岡鹿門(千仞)の漢学塾・綏猷堂に入塾。のちに塾頭となり、翌年退塾。
24	1883年	9月9日 司法省法学学校(正則科・2期生)に入学。(104名が2期生として同期入学。)
25	1884年	1月13日 伯父の加藤家の養子となり、加藤家を再興し、大原忠三郎から加藤恒忠となる。
26	1885年	2月 司法省法学学校内において同期数名で「賄征伐事件」を起こす。拓川のほか、学生総代の一人であった原敬をはじめ、陸羯南ら16名の正則科第2期生が放校処分となる。
27	1886年	3月 中江篤介(兆氏)の仏学塾に入塾。
29	1888年	11月21日 原敬が準奏任官御用掛の外務省交信局勤務となる。
31	1890年	6月15日 甥・子規が松山より上京。その後拓川の指示により、子規が陸羯南を訪ね面会する。
32	1891年	11月10日 久松定謨とともにフランス留学に横濱港を出発。
33	1892年	1月12日 インド洋、スエズ、マルセイユを経てフランス・パリに到着。
34	1893年	5月9日 天津駐在の原敬が外務省より書記官を拝命し、フランス助勤を命ぜられる。
35	1894年	6月15日 原敬の斡旋により外務省交際官試験(奏任官五等と後日判明)に任ぜられ、フランス公使館在勤を仰せ付かる。
36	1895年	4月11日~14日 ベルギー・ブリュッセルにて駐ベルギー兼任公使の西園寺公望と事務引継を行う。以後、西園寺侯と親交を深める。18日にパリに帰任。
37	1896年	7月7日 ベルギー王国皇帝陛下より贈与されたレオポール勲章シュワリエーが受領され佩用が允許。
38	1897年	12月26日 帰朝命令を受けて帰国に向けパリを出発。
39	1898年	8月16日 外務省参事官(政務局勤務)に任ぜられる。
40	1899年	10月30日 外務大臣秘書官に任ぜられる。
41	1900年	3月29日 公使館書記官フランス在勤を任ぜられる。
42	1901年	6月5日 フランスに向け東京発、7月17日 フランス・パリに到着。
43	1902年	8月より年末まで、ポルトガル総領事引揚げに関連し、パリ・リスボン間を複数回往復。
44	1903年	11月8日 フランス共和国政府より贈与されたレジオンドノール第五等勲章が受領され佩用が允許される。
45	1904年	2月13日・14日 スペイン王国摂政皇后陛下より贈与されたイザベル・ラ・カトリク勲章シュワリエーが受領され佩用が允許される。
46	1905年	3月18日 フランス公使館の代理公使となる。
47	1906年	8月末 新田長次郎がヨーロッパ視察中に三井物産の長谷川銚五郎からの紹介でフランス公使館を訪れ面会する。諏訪秀太郎を通訳(案内役)として紹介し、新田長次郎はパリに11日間滞在する。
48	1907年	11月22日 スペイン王国摂政皇后に謁見、首相、外相を訪問。
49	1908年	12月8日 第1回日仏条約改正会議に出席。
50	1909年	11月5日 パリでブラジル条約(日伯修好通商航海条約)調印に参加。国交を樹立。
51	1910年	8月4日 日仏改正条約調印に参加。
52	1911年	10月9日 公使館一等書記官(高等官四等)に任ぜられる。
53	1912年	10月12日 パリ万国博覧会臨時博覧会事務局の臨時博覧会事務局を仰せ付かる。
54	1913年	3月10日 パリ発、4月22日 横濱に到着し帰国。
55	1914年	4月30日 外務書記官兼外務大臣秘書官に任ぜられる。
56	1915年	8月19日 樫村清徳(医師・元東大教授)の長女・壽(ヒサ)と結婚。
57	1916年	5月21日 外務省総務局人事課長を命じられる(分課規程改正)。
58	1917年	10月2日 弁理公使、兼任外務書記官に任ぜられ、総務局人事課長を命ぜられる。
59	1918年	10月4日 フランス共和国政府よりレジオンドノール勲章コマンドールが授与され佩用が允許される。
60	1919年	10月4日 スペイン王国皇帝陛下より授与されたイザベル・ラ・カトリク勲章グラン・クロワを受領し、佩用が允許される。
61	1920年	2月7日 特命全権公使に任ぜられベルギー駐節を仰せ付かる。
62	1921年	7月4日 ベルギー・ブリュッセルに到着し着任。
63	1922年	9月19日 甥・子規が死去(34歳11ヶ月)。
64	1923年	12月28日 旭日小綬章および金千圓が授賜される(北清事変の功)。
65	1924年	2月8日 日本海軍によるロシア帝国海軍艦隊への旅順口攻撃により日露戦争が開戦。

4 6	1905年	(好古が日露戦争へと出発し、騎兵第1旅団長としてロシア軍と戦い、歴史に残る戦果を挙げる。)
4 7	1906年	1月19日 万国海軍会議委員(参列)を仰せ付かる。 4月1日 勲二等瑞寶章及び金八百圓が授賜される(日露戦役)。 4月24日 スペイン国王陛下下結婚式に特派使節として夫妻で参列を仰せ付かる「官報6843号」。 7月スイス・ジュネーブでの第2回万国赤十字条約改正会議に日本全権委員として出席。 7月6日 日本国および韓国の両国皇帝に代わり特命全権公使として赤十字改正条約および最終議定書に調印。 8月17日 林董外務大臣から条約調印に際して韓国皇帝に代わり調印した件につき批難を受ける。(この結果 韓国統監の伊藤博文の意に反することになる。)
4 8	1907年	11月2日 ベルギー王国皇帝陛下より贈与されたレオポール勲章グランクロアを受領し佩用が允許される。 12月 帰朝命令(10月)を受けて妻子とともに帰国。
4 9	1908年	2月1日 スペイン王国皇帝陛下より贈与されたシヤール・トロワール第一等勲章を受領し佩用が允許される。 5月9日 外務省を依願退職。
5 0	1909年	1月 岩崎一高(のちの第6代松山市長、井上要(伊予鉄道社長)らより衆議院議員選挙候補への勧誘を受けらる。 5月15日 第10回 衆議院議員選挙が実施され愛媛県松山選挙区において当選。
5 1	1910年	3月14日 衆議院本会議で「外交文書公表二関スル建議案」を提出し理由説明。 7月1日 原敬らの要請を受けて大阪新報の社長に就任。のちに北浜銀行の非常勤取締役就任。 3月15日 衆議院本会議に「外交文書及国際交渉事件ノ秘密二関スル質問」を提出。 3月16日 銀杯壹箇が授賜される。 予讃鉄道敷設に奔走。
5 2	1911年	5月15日 衆議院議員任期満了。
5 3	1912年	5月27日 貴族院議員(勅選)に選任される(西園寺内閣)。
5 4	1913年	5月3日 貴族院視察団の一員として中国視察に出発。 5月17日 黎元洪らと会う。 5月27日 袁世凱らと会う。
5 5	1914年	4月8日 三男の忠三郎が正岡律と養子縁組される。 4月1日 旭日重光章が授賜される。
5 6	1915年	1月4日 白川福儀・北豫中学校校長死去。これにより後任校長問題が生じる。
5 7	1916年	1月9日 加藤彰廉(元衆議院議員、元大阪高等商業学校校長)を訪れ、23日同彰廉と半日対談。2月24日 彰廉會を開くなど尽力し、その結果、北豫中学校長後任校長就任要請に対して受諾を得る。
5 8	1917年	5月 北京、天津、南京など中国視察旅行。 2月13日 ローマ各国議員商事委員会に向けて貴族院側の委員となる。 4月12日 イギリス・ロンドンにてロバート・セシル卿と会見。 5月17・18日 ローマ商事委員会に出席。 12月15日 錦鶏間祇候を仰せ付かる。 5月21日 中国視察に神戸港より出発。 6月3日 段祺瑞首相を訪問する。 (9月29日 原敬が内閣総理大臣に就任。)
6 0	1919年	12月10日 パリ講和会議の随員嘱託顧問として、牧野伸顕・次席全権とともに出国。 1月12日 パリ講和開会式出席。牧野伸顕全権到着、第一回講和総会に出席。 2月11日 金杯壹箇が授賜され(多年の貴族院議員での勲勞不尠より)、12日に受領する。 5月19・20日 ベルギー・ブリュッセルにて万国議員商事委員会に出席。 8月12日 原敬首相より特命全権大使に任せられ、シベリア出張を仰せ付かる。 9月21日 敦賀より出国。10月13日 ハルピンを経由してオムスクに到着。 10月17日 アレクサンドル・コルチャークと会見。 10月31日 天長節の祝宴を開き、オムスク政府の首相、外相、蔵相、イギリス大使、イギリス將軍、イギリス代表者が参加する。
6 1	1920年	1月10日 チタに到着。11日 グリゴリー・セミョーノフと会見。 1月17日 ハルピンに到着。19日・21日 ドミトリー・ホルワット將軍ほかトレチャーク、ラムソン等と会見。
6 2	1921年	1月26日 奉天に到着。27日 張作霖と会見し晚餐に参加。 9月7日 金杯一組が授賜される(対独平和条約締結の功)。 9月21日 北中国を旅行に出発。26日に神戸を嘉義丸で出帆。 9月 原敬首相よりワシントン会議の全権委員の就任要請を受けるが断る。 11月4日 原敬首相が東京駅で暗殺される(享年66歳)。

63	1922年	<p>この頃より、食事時に異常を覚える（のちに喉頭癌と判明）。 1月 日本の国際連盟協会愛媛支部が発足し会長となる。 3月5日 井上久吉（松山市議会議長）、重松清行（後に拓川市長時の助役）、岩崎一高らより松山市長就任を懇請されるも辞退。4月 秋山好古、新田長次郎などからも市長就任を懇望される。 4月12日 松山市長の就任を決意し午後2時に三津にて詮衡委員に通知。 5月26日 愛媛県松山市の高浜に到着。第5代の松山市長に就任。 6月17日より上京して、松山城趾問題に奔走し、久松家が陸軍省より払い下げを受け同時に松山市に寄附し、市民に開放されることになる。 8月 軍備撤廃論を演説。 8月22日 松山高等商業学校の設立発起会が開かれる。 9月14日 松山高等商業学校の設立発起人会（8人）が発足しメンバーとなる。同会が設立計画を発表。 9月17日 加藤彰廉（北豫中学校長・のちの松山高等商業学校初代校長）とともに大阪に向かい、18日に新田長次郎を訪ね、設立資金・経営費の援助の約束を受ける。 9月21日から 東京小川町賀古病院に入院。 11月22日 摂政官（皇太子裕仁親王）殿下を奉迎する。24日に殿下に謁見（その順位は好古の次の2番目）し、高濱に奉送する。</p>
64	1923年	<p>12月7日 台湾旅行に門司港から出発し、16日に帰郷。 12月20日 松山市議会に簡易住宅建設の議案を提出するも反対多数で廃案となる。 12月26日 財団法人松山高等商業学校寄附行為および松山高等商業学校設置認可を申請。 1月2日 国連協会愛媛支部が設立。 1月19日 広東より南中国旅行に出发。 1月25日 上海着。30日に香港において危篤。2月25日には「浪の家」に帰郷。 2月22日 財団法人松山高等商業学校寄附行為および松山高等商業学校設置認可。 2月27日 松山市予算市会に参加し、補助金復活に異を唱える。 3月2日以降 高浜海岸の新居「浪の家」で病臥となる。 3月3日 松山高等商業学校の理事会が開かれ理事となる（初代校長は加藤彰廉・専務理事）。 3月17日 新居「浪の家」の揮毫を西園寺に依頼。 3月18日 元老・西園寺公望公が拓川危篤の知らせを受け、首相・加藤友三郎に叙位叙勲についての特別の詮議を依頼する電報を発信。</p>
1932年	1930年	<p>3月19日 外相・内田康哉が首相・加藤友三郎に、拓川への従三位および旭日大綬章の取り計らいを申進。 3月26日 松山市長辞表提出。午後10時50分に永眠（享年64歳）。 3月27日 従三位に叙任され、勲一等旭日大綬章が授賜される。天皇皇后両陛下より祭祀料御下賜される。 3月30日 松山市三番町の私邸において告別式。松山市の相向寺の墓に葬られる。 4月8日 東京都港区三田の濟海寺において分骨埋葬告別式を行う。 4月25日 松山高等商業学校の授業開始。 1月25日 犬養毅による題字の拓川會編『拓川集 随筆篇 上』同『拓川集 随筆篇 下』が発行される。 9月10日 東京上野の拓川集編輯所において「第1回 加藤恒忠追憶座談会」を開催し、犬養毅らが参加。10月14日 東京上野の拓川集編輯所において「第2回 加藤恒忠追憶座談会」を開催し、石井菊次郎、松井慶四郎、吉田茂らが参加。 5月15日 拓川集の編著者の一人である内閣総理大臣・犬養毅が海軍の将校達により殺害される。（松山大学では、加藤拓川を新田長次郎、加藤彰廉とともに学園の「三恩人」と称する。）</p>

【参考文献・資料】

主な参考文献・資料として、『拓川集・日記篇』（1931年）、『拓川集・拾遺篇』（1933年）、原奎一郎編『原敬日記①青年時代篇』（1950年）、古屋壮一・今村暢好「松山大学法学部松大GP資料（一）」『松山大学論集』第25巻第3号（2013年）28頁以下、同「松山大学法学部松大GP資料（二）」『資料2』引用の各「官報」、および拓川翁の令孫である正岡明氏が所蔵する各「辞令」、各「勳章」、国立公文書館所蔵の各公文書を参照。

さらに、拓川會編『拓川集・随筆篇・上』（1930年）、『拓川集・随筆篇・下』（1930年）、『拓川集・書簡篇』（1931年）、『拓川集・追憶篇』（1933年）、井上要『北豫中學松山高商樂屋ばなし』（昭和1933年）、松山商科大学『松山商科大学六十年史』（1959年）、畠中淳編著『加藤拓川（松山子規会叢書第13集）』（昭和1982年）、島津豊幸『加藤拓川傳ある外交官市長の生涯』改訂版（1997年）、成澤榮壽『伊藤博文を激怒させた硬骨の外交官 加藤拓川』（2012年）を参照した。

※ 本略年譜は、2023年に愛媛県美術館で開催された「子規の叔父・加藤拓川展」（松山大学創立100周年・松山子規会創立80周年記念）の会場で公開されていたものである。より詳細な年譜については、正岡明・今村暢好『加藤拓川資料集』松大論集30巻5-1号（法学部開設30周年記念号）掲載の年譜を参照いただきたい。